

はじめに

今回の「はじめに」は、「はじめに」にふさわしい「はじめに」にしたいと思う。

卒業生への贈り物に、私が動物のイラストを描いた、という話だ。

卒業は別れ、「別れは新たな始まり」というではないか（深く考えないでいただきたい）。

一昨年前（二〇一九年）の、確か一二月だったと思う。

当時、生物部の部長をしていたMwくんが、私の研究室に来た。

話を聞くと、翌年三月に卒業する生物部の先輩に、記念のマグカップを贈りたいのだという。そこで顧問である私に、カップにプリントする絵を描いてほしいというのだ。

ここだけの話だが、客観的に言うとは私はかなり絵がうまい。芸術という言葉はあまり使いたくないのだが、**まー、視覚芸術の才能にあふれている**、と言えよいのだろうか。そして、私

くらいになると**もう写実は描けない**。才能が深まると悲しいかな、どうも、そういうことになるらしい。

ああ、謙虚の塊の私がこんなことを言ってしまった。なんでこんなことを言ってしまったのだろうか。**ここで言ったことは聞かなかったものとして**以下を読んでいただきたい。

Mwくんは、魚類を中心とした川の動物が大好きな学生で、一年生のときから生物部に入っ
て、私とも何度か川へ行った。

Mwくんが、私が絵がうまいことを、どうして知っていたのかはわからなかった。Mwくんは、私が絵を描くところなど見たこともなかったはずだ。

でも、いずれにしろ、**学生に頼まれれば嫌とは言えない**。「どんな絵がいいの？」と聞いた
ら「動物の絵だったら何でもいいです」と言うのだ。

私は、その日の夜、Mwくんからの依頼を達成すべく、また卒業生のことも思いつつ、紙の
前に座り、さて、何を描くかと考えた。

そして描いたのが、ニホンモモンガだったのだ。

はじめに

その後、MWさんに渡ったその絵がプリントされてでき上がったマグカップが下の写真だ。

思いつき写真じゃないか、と思われた方は、

………浅い！

見る人が見れば、わかるはずだ。それは単なる写真ではないのだ。一オクターブ、はずしているのだ（言った私もよく意味がわからないのだが、そんな感じなのだ）。

ちなみに、マグカップのニホンモモンガは、私が頭のなかで想像して描いたものではなかった。私が撮った、ある写真を見ながら描いたものだった。

あるとき、スロバキアの日本大使館に勤務す



卒業していく生物部の先輩に贈るために依頼された動物の絵をプリントしたマグカップ。2019年度の卒業生のためのものだ

る、ある女性のスロバキア人からメールがあったのだ。大使館が「日本の自然」みたいな本をつくるから私にニホンモモンガの写真を提供してくれないか、という依頼だった。私がそれに応えて送ったのが、ある写真だ。

余談だが、つまり、ヨーロッパでは、「ニホンモモンガと言ったら小林」だったのだ。これは大きなことだ。

そして、その写真は、その本の表紙も飾ることになった。

ヨーロッパにはモモンガはいなかったのだ、印象に残ったのだろ



「日本の自然」………みたいなのがタイトルとしてスロバキア語で書かれた本の表紙

う。

本の裏表紙に、ちゃんと、この写真は、Kobayashi Tomomichiが撮ったものだを書いてあった。スロバキア語で。

なんの話だったかわからなくなってきた。

まー、とにかく、私は写真もうまく絵もうまい。そしてMwくんから頼まれて、今ごろはスロバキアの、家庭という家庭で読まれているかもしれない「日本の自然」という本の表紙を飾っているニホンモモンガの絵を描いた、ということなのだ。

マグカップの絵を見られた読者の方は思われるかもしれない。

ニホンモモンガだったら、やっぱり、木から木へと飛翔している絵が、**ニホンモモンガらしくていいのではないかと。**

もしそう思われた方がいたら、**それは、………浅い！**

確かにニホンモモンガは、滑空する哺乳類として、ムササビと並んで有名だ（ただしニホンモモンガの体重は百数十グラムで、一キロを超えるムササビよりずっと小さい。そして顔など

はムササビより一〇倍くらい愛らしい)。

しかし、これは多くの人が認識していないことなのだが、モモンガは「リス」の一種なのだ。齧^{げっ}歯類は、大きく分けると、ネズミ類とヤマネ類とリス類の三つのグループになる。そして、そのリス類のなかにモモンガは入るのだ(ちなみに、今、ペット店で売られているモモンガ、つまりフクロモモンガはカンガルーやコアラなどと同じ有袋類である。したがって、**モモンガは、フクロモモンガよりむしろクジラに近い**のだ。モモンガもクジラも有胎盤類だからだ)。

もっと言えば、リス類(分類学ではリス科)は、樹上性のホンドリスやエゾリスが属するリス亜科と、シマリスやプレリードッグが属するジリス亜科に分かれ、モモンガはリス亜科に入る。つまり、ホンドリスは、シマリスよりモモンガに近い、というわけだ。

それがニホンモモンガの原点なのだ。

私は、その点をしっかり認識してもらいたいと思い、この写真を選んだのだ。もちろん、『滑空』という特徴も示すために、腹部に、たるみを帯びてはみ出した飛膜や、夜行性ゆえの大きな目、小さな口元(夜の滑空で着地先の木に吻^{ふん}をぶつけないための適応?)も描きこんだ。

まー、そういうことだ。

そんな繊細で配慮に満ちた思考を眠い眠い頭をむち打ちながら行ない、三〇分か一時間ほど

はじめに

かけて描いたのだ。**眠いわりには、また時間のわりにはよく描けたぞ、**と思いながら眠りについたのを覚えている。

翌日だったと思うが、それをMwくんに渡すと、さすがMwくん、**すごい！みたいな反応**をしながら受け取ってくれた。「生物部」と「小林朋道」（私の名前）はMwくんからの依頼で書き添えたものだ。

そして月日は流れ卒業式も近づいたころだった。Mwくんが「先生、ありがとうございます」として先生に絵を描いてもらったマグカップができました」と言って、マグカップを研究室に持ってきてくれた。

ところがだ。**正直に言うと、**そのマグカップを見て私はがっかりした。

マグカップのニホンモモンガからは、**私が苦心して、意識して、描きこんだ毛の柔らかさや鋭さが消えていた**からだ。

きつと印刷再現性に問題があったにちがいない。私はネットで、そういったプリントをやっているサイトをいくつか調べてみた。思ったとおりだった。陶器の表面にプリントすると、細い線はほんやり消えそうな線になってしまうのだ。太いしっかりした線は、くつきりとその姿

を残していた。

一方、プラスチックの表面へのプリントでは、細い線でもくつきり残ることを知った（そんな教訓が一年後に役に立つとは、**そのときは知る由もなかったのだが**）。

さて、それから一年が過ぎたころだった。一月だったと思う。

Mwくんを引きついで生物部の部長になったMyくんが私の研究室を訪ねてきた。「生物部の卒業生に贈る記念品にプリントする動物を描いてほしい」とのことだった。

私は、一年前を思い出した。研究室の棚には、ちよつと失敗したと私が思う**ニホンモモンガのマグカップがちょこんと正座**していた。

Myくんはヤギ部にも入っていて、ほんとうに真面目にヤギの世話をしていた。私の研究室からヤギの放牧場の柵の入り口が見えるのだが、休みの日にもMyくんがよく、餌やりや小屋内の掃除で出入りしていた。

だから、というわけではないが、**私は二つ返事で引き受けた**。昨年のことを反省材料にして、完成したマグカップのイラストが満足のいくイラストになるように頑張ろうと思ったのだ。

はじめに

ところがだ。**私の目論見は少しはずれることになった。**つまりだ、MYくんが考えていたのは、陶器のマグカップではなく、プラスチック製のタンブラーだったのだ。

じゃあ、細い線もくつきりとプリントされる。できれば細い線で描くほうが描きやすいし、タンブラーならそのほうがおしゃれだ。

ということ、私は、いつも私が愛用している、描き味最高のペンで動物を描くことにした。**で、動物は何にしたのか!?**

読者のみなさんのなかに、そう思われる方はいないだろうか。**いてほしい。**

一人くらいはおられるだろう。

じゃあ、**教えて差し上げましょう。**

試行錯誤の結果、最終的に私が選んだ動物は、………**モリアオガエル**だったのだ。

哺乳類が好きな部員もいたし、昆虫・甲殻類が好きな部員もいた。魚が好きな部員も両生・爬虫類が好きな部員もいた。これら全体のバランスをとると、なんとなく両生類という感じがしたのだ。

大学林の水場で、雌を求めて鳴いていた雄のけなげで愛らしい姿の写真を参考にした。**芸術的写真主義で描いた**のが、下の写真である。

MYくんが一つ私にくれたのだ。細い黒の線がくっきりと現われて、今度は私も気に入った。

さてさて、ここまでだったら私はイラストの話を「はじめに」をまるごと使って書くことはなかっただろう。どこかの章で軽くふれるだけにしておいただろう。

でも**話はこれで終わらない**のだ。



翌年も同じ依頼を受けた。今度はプラスチックのタンブラーだった。私はモリアオガエルを描いた

生物部の話を聞いたのかどうかはわからないけれど、**ヤギ部が現われたのだ。**ヤギ部が。そのとき、三年生の前部長であるUkさんが研究室にやって来て、**ズバリ、言ったのだ。**「ヤギ部の卒業生にマグカップを贈るので、それにプリントするヤギのイラストを描いてもらえませんか」

私はどんなマグカップか、つまり素材は陶器かどうかを聞いた。普通の陶器だという。

来たか。これこそ**リベンジのマグカップだ。**

私は一つ返事で了解した。頭には、もう、太い線が描けるマジックのようなものが浮かんでいた。

でも、Ukさんが帰ってからよく考えたら、一つ、大事なことを聞くのを忘れていたことに気がついた。

それは、**どんな感じのヤギを描くのか？**ということだった。

生物部のときは、まー、「どんなものでもいいです」というリクエストだったので、まー、たくさんの動物のなかから選んで適当に描けばいい、という、なんというか、自由さがあつた。

でもヤギ部の場合は、描くものは「ヤギ」だ。「チンパンジー」を描いたら叱られるだろう。だったら、今度は、**どんなヤギを描いたらよいのか**聞くべきだろう。ヤギと指定されているのなら、どんな感じのヤギを描けばいいのか……。

たとえば「リアルな、ヤギらしいヤギ」なのか「ニコツと笑ったような少々擬人化されたようなお茶目なヤギ」なのか、あるいは……。Ukさんたちにもいろいろイメージがあるだろう。

さっそく、私は、LINEでUkさんに聞いてみた。

Ukさんの返信はこうだった。

「そうですね。どんな感じのヤギか、言わないとわかりませんよね。みんなと話して、また連絡します」

そして、数日後。

「五匹のヤギがそろって並んでいるところを描いてほしいということになりました。それから、そのなかに先生も入っていてほしいということになりました。よろしくお願いします」……。

Ukさんははっきりとそう言ったのだ。いつものようにほほえみながら。

私は、一瞬、**へっ!?**となった。そして、気持ちが少しだけ安定してきたら、はっきり思った。

「聞かなければよかった」

五頭のヤギを描くということは当然、一頭ずつの個性というか、特徴が出ていないとだめだろう。同じようなヤギを五頭並べて描いてもだめだろう。**だんだんと気が滅入ってきた。**

私は、ヤギの絵のタッチを聞いただけに、まさかそんな具体的な**（そしてかなり難しい）返事**が返ってくるとは。そして私自身もおまけのように描かなければならないとは……。

でも、よく考えたら、私からの「どんな感じのヤギか？」に対して、その答えはありなのだ。彼らなりに考えた結果なのだ。**描くしかない。**5 + 1を。Ukさんからの返事を聞いた時点で、もう絵の「タッチ」のことなど頭から消えていた。そんなことは小さなことのように思えていた。

はじめに

その夜から、疲れた頭を回しながら私は考えた。**何度も下書きを描いて、**そして三日か四日後で上がったのが次ページの絵だ（名前を入れたのもUkさんからの依頼だ。念のために）。読者の方にはなんの変哲もない絵に見えるかもしれない。しかし、しっかりヤギたちに寄りそっている部員には、**どのヤギがどの個体か、**きつとわかってくれるにちがいない。

それぞれのヤギのサイズや体型、角の有無、さりげない顔の表情。間違いない。わかつてくれるはずだ。

そして、バックに、小屋を入れたのも私
なりの配慮なのだ。

部員たちは、毎日、栄養が偏らないよう
にと選んだ補助食物を与え、糞や食物の食
べ残しが散らかっている小屋のなかを掃除
した。

そして、そして、私は、メイと一緒に小
屋のなかから顔をのぞかせている（謙虚で
はないか）。

こうして、完成した陶器のマグカップが
次ページの写真だ。



部員たちのリクエストに応じて、ヤギ部の卒業生に贈るマグカップに5頭のヤギと私を描いた

はじめに

そう、「卒業生への贈り物に動物たちを描いた話」、またまた、**ここでは終わらない。**

私のゼミでは卒業していく四年生のために三年生が、何か記念になる贈り物を渡すのが恒例になっている。

そして、今年は「皿」を贈るというのだ。

皿だ。陶器だ。……イラストだ。

三年生を代表してKwさんが研究室にやって来て私に言ったのだ。

「四年生が研究対象にした動物を描いてください」と。



完成したマグカップ

今年は、諸事情で、卒業生は四人しかいなかった。だから動物は、**コウモリが二種類**（キクガシラコウモリとユビナガコウモリ）、**イワツバメ**、そして**チャコウラナメクジ**だ。

まー、三つ目までの動物はいいとして、チャコウラナメクジというのは、庭先をよく這っている、時には家のなかにも入ってくる、あの小さめのナメクジだ。一方で、最近、学習能力が高いことが研究によって示されてもいる、でもやっぱり**小さな地味ーな軟体動物**だ。

断っておくが、私はけっして、チャコウラナメクジを見下しているわけではない。哺乳類や鳥類より軽く見えているわけではない。しかしイラストとなると……。

チャコウラナメクジを描くのは難しいぞ、とちよつと思っただけだ。**あの地味ーな動物をどう描く？**

でももちろん、私は描いた。そしてできたのが次ページの写真だ（周囲の字は、Kwさんが、卒業生の名前も入れて書いたものだ）。

Kwさんは、私には贈呈してくれなかったもので、会社で新入社員研修が終わったばかりの卒業生のYsさんに頼んで撮ってもらったものだ。正確には、Ysさん自身ではなく、Ysさんのお母さんが撮ってくださったものだ。

はじめに

Ysさんは、皿を実家に置いて、新たな街で社会人のスタートを切っていたので、私からの厄介な依頼を聞いて、実家のお母さんに頼んで撮ってもらった、というわけだ。Ysさんのお母さん、どうもありがとうございます。

贈り物に動物のイラストを描いたという話、これでほんとうに終わりだが、**最後の最後に**、贈り物ばかりに動物を描いていると、あるとき、**自分のために**、紙コップ（あの使い捨てにされる紙コップである）に絵を描いて、大事に使ってみようと思った。

二分はかかっていないと思う。サラサラ



でき上がった、ゼミの卒業生4人に贈るそれぞれの研究対象を描いたお皿。3年生からのプレゼントだ

ツと、でも気持ちをこめて描いた、動物イラストつきの紙コップが最後の写真だ。

結構気に入っているのだ。この、芸術的茶目っ気イラストが。

まだ一回も使っていないのだ。**きっと長持ちするぞ。**

以上が、今回の（ちょっと長めの）「はじめに」だ。

私は卒業生も含めて、読者の方にお伝えしたかったのだ。

みなさん、どうか、元気を出して（元気な方はますます元気をふくらませて）。

新しい生活はいつの日からでも始めるこ



思いついて、自分のために紙コップにモモンガの顔を描いてみた

はじめに

とはできる。それぞれの暮らしのなかで、悩み、苦しみ、もがき、考え、自分だけの生きる意味をつかんでほしい。そのために、本書が、一服の心休めになったらと思つて今回も本を書いた。

二〇二一年一月四日

小林朋道